「奥の細道むすびの地」大垣を歩く

徳山ダムに向かうために、久しぶりに大垣に行った。ゼミ生が卒論で大垣のまちづくりをとりあげるので、せっかくの機会なので街を歩くことにした。駅前には「奥の細道むすびの地　芭蕉元禄の街 大垣」という大きな看板が掲げられていた。

時間もないので、とにかく市役所に向かい、資料を手に入れて、「奥の細道むすびの地」に行った。観光マップによると、松尾芭蕉は元禄 2 年(1689)の秋、約 5 カ月の「奥の細道の旅」をここ大垣で終えた。そのおり、芭蕉は「蛤のふたみに別行秋そ」と詠んで、水門川の船町港から桑名へ船で下ったという。風格のある住吉灯台と船町港跡、そして川辺の落ち着いた風景が心をなごませてくれる。芭蕉をしのびながら、川辺に沿って歩いた。

駅前から商店街がつづき、すこし入ると大垣城や大垣公園があり、水門川に沿って歩くと「奥の細道むすびの地」にたどりつく。市の HP によると、大垣はかつて揖斐川・水門川・杭瀬川などの河川を利用した舟運が盛んだった。とくに水門川は物資の主要経路で、明治時代になっても大垣と桑名間の物資や人の輸送に大変な賑いをみせていた。市議会だよりには「文化の港 住吉燈台」とあった。こうした歴史と川と水を生かして、特色あるまちづくりを期待したい。　　(2006 年 9 月４日　記)